

令和7年度 男女共同参画に関する市民意識調査 【概要版】

I 調査概要

1.調査目的

男女共同参画に係る様々な施策の基礎資料とするため、市民意識調査を実施した。

2.調査実施概要

- (1) 調査対象 18 歳以上の静岡市民
- (2) 標本数 2,500人
- (3) 抽出方法 住民基本台帳から 18 歳以上の市民を無作為抽出
- (4) 調査方法 調査票については郵送、回答については自記式郵送回答、または Web 回答
- (5) 調査期間 令和 7 年 6 月 23 日(月)～7 月 14 日(月)
- (6) 調査機関 株式会社清水地域経済研究センター
- (7) 回収状況

配布数	郵送回答数	Web 回答数	有効回収数	有効回収率
2,500 票	680 票	170 票	850 票	34.0%

3.調査内容

- (1) 回答者属性
- (2) 男女の平等感について
- (3) 仕事、家庭生活、地域活動、個人の生活についての優先度について
- (4) 仕事、家庭生活について
- (5) 男女共同参画に関わることがらや経験について
- (6) 性の多様性に関することについて
- (7) ドメスティック・バイオレンス(DV)に関することについて
- (8) 困難を抱える人に対する支援について

※本概要版では、上記の調査内容の中から、主だった設問の調査結果を抜粋して掲載しています。

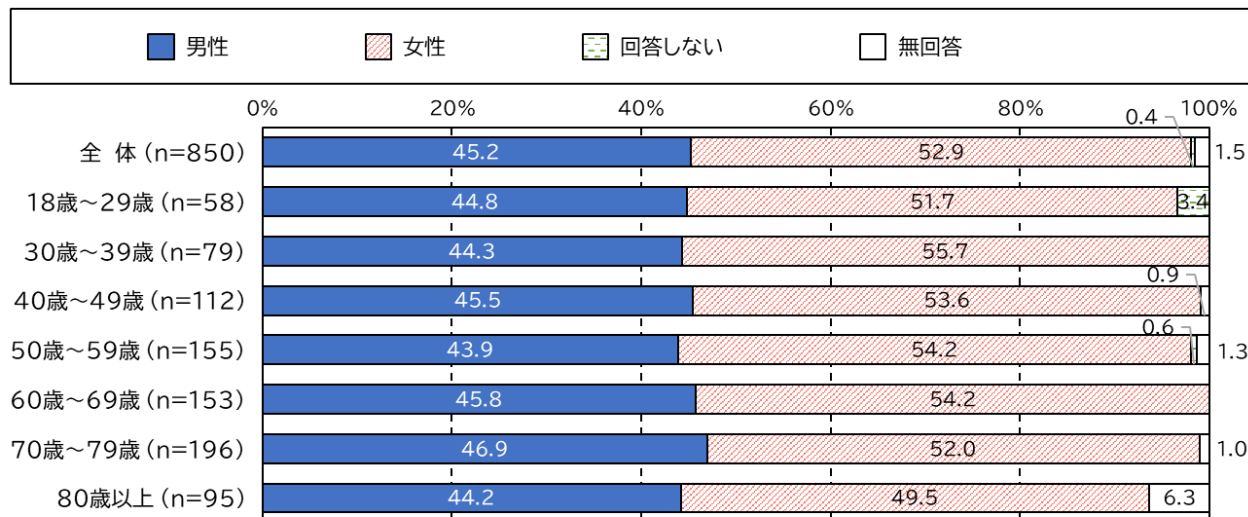
調査結果の読み方

- ◆ 結果は百分率で表示し、小数点第 2 位を四捨五入している。このため百分率の合計が 100%にならないことがある。
- ◆ 数値やグラフの中の「n」は、回答者総数を示し、回答比率はこれを 100%として算出している。
- ◆ 複数回答をしてもよい設問では、百分率の合計が 100%を超える場合がある。

Ⅱ 調査結果概要

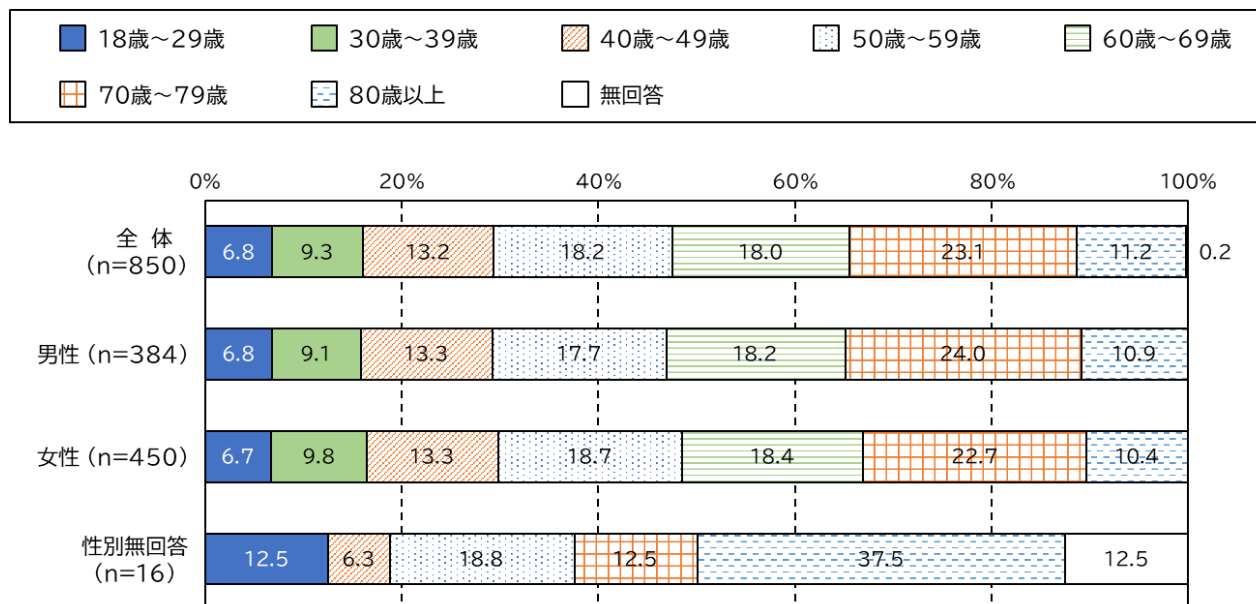
1. 回答者属性

<性別>



- 本問において、回答選択肢を「男性」「女性」「回答しない」とし、どれも選択していないものを「無回答」とした。
- 以下の設問において、本問における「回答しない」と「無回答」を合わせたものを、「性別無回答」とした。

<年齢>



- なお、以降の本文での記載方法は、「18 歳～29 歳」を「29歳以下」、「30 歳～39歳」を「30 歳代」、「40 歳～49 歳」を「40歳代」、「50 歳～59 歳」を「50 歳代」、「60 歳～69 歳」を「60 歳代」、「70 歳～79 歳」を「70 歳代」とし、「80 歳以上」はそのままの記載とする。

2. 男女の平等感について

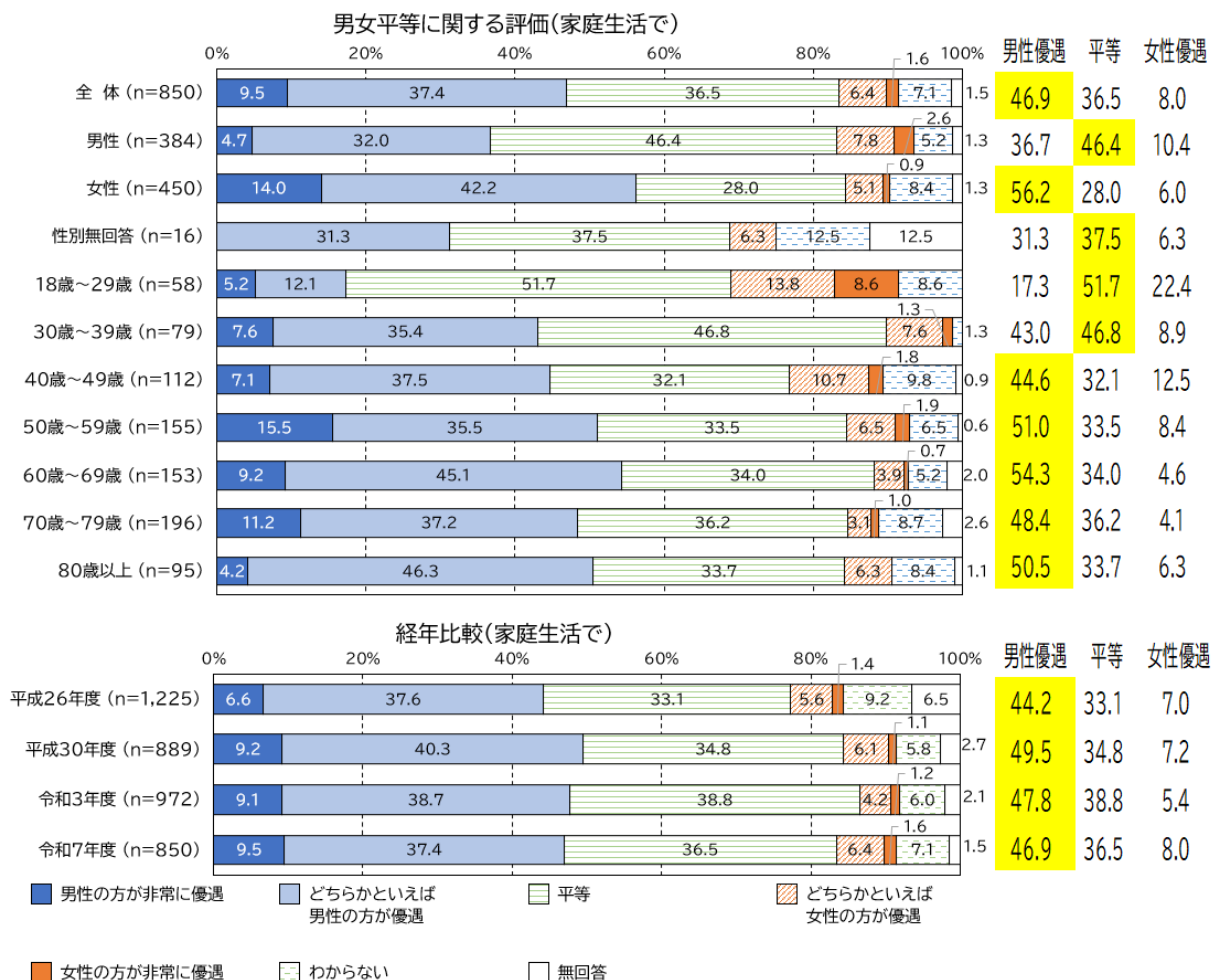
〔問1〕 あなたは、次の分野で男女の地位は平等になっていると思いますか。
あなたの考えに近いものをお答えください。（項目ごとに○は1つずつ）

<家庭生活>

全体では、「男性の方が非常に優遇」が9.5%、「どちらかといえば男性の方が優遇」が37.4%と、「男性優遇」との回答が46.9%となり、「平等」の36.5%を約10ポイント上回った。

性別でみると、男性は「平等」と回答した人の割合が最も高く、女性は「どちらかといえば男性の方が優遇」と回答した人の割合が高かった。

年齢別では、30歳代以下では「平等」とする割合が高かったが、40歳代以上では「男性優遇」とする割合が高かった。



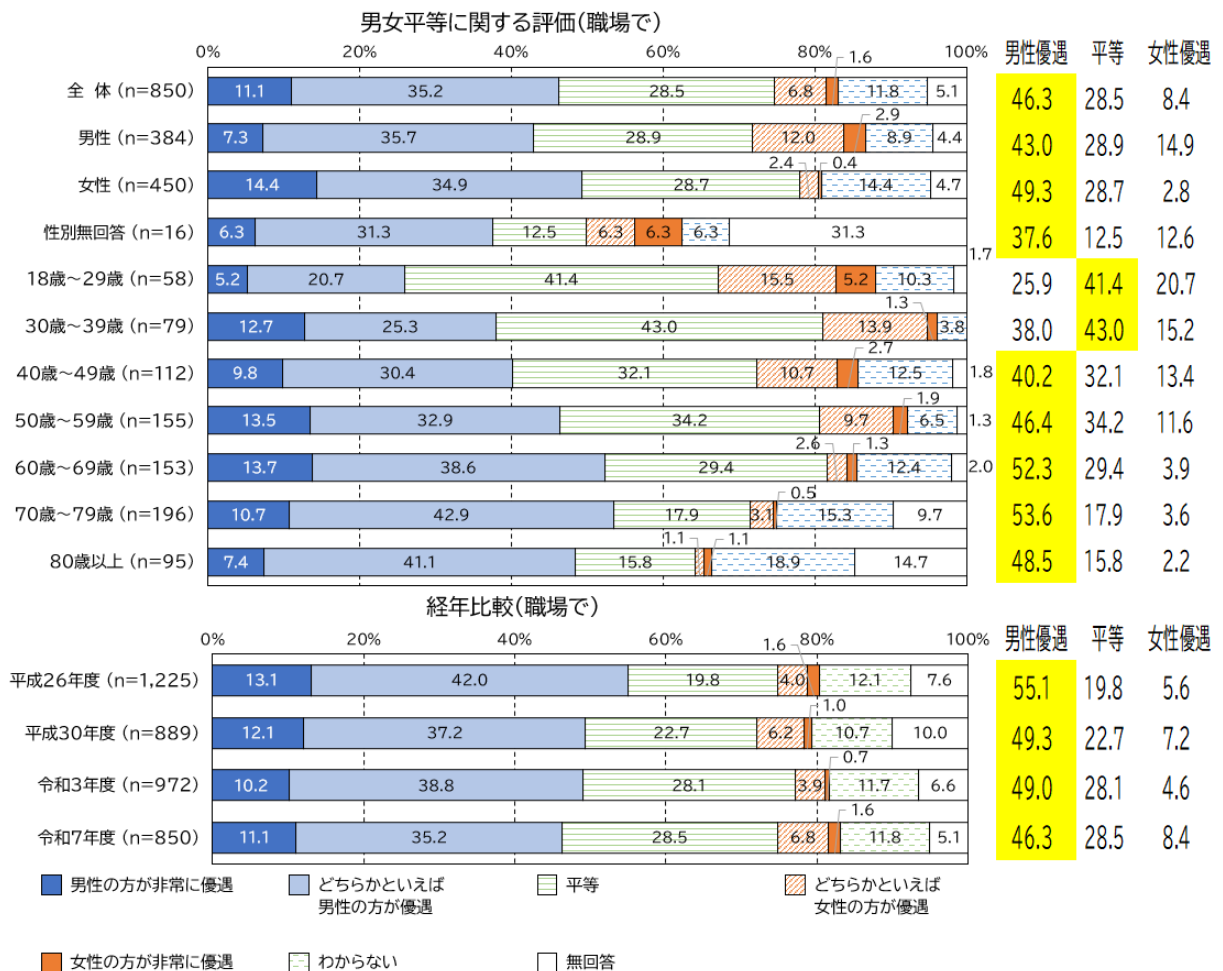
<職場>

全体では、「男性の方が非常に優遇」が 11.1%、「どちらかといえば男性の方が優遇」が 35.2%と、「男性優遇」との回答が 46.3%となり、「平等」を 18 ポイント近く上回った。

性別でみると、「男性優遇」と思う割合は、女性の方が高かった。

年齢別では、30 歳代以下では「平等」とする割合が高かったが、40 歳代以上では「男性優遇」とする割合が高かった。

経年比較では、「男性優遇」とする割合は減少傾向にある。



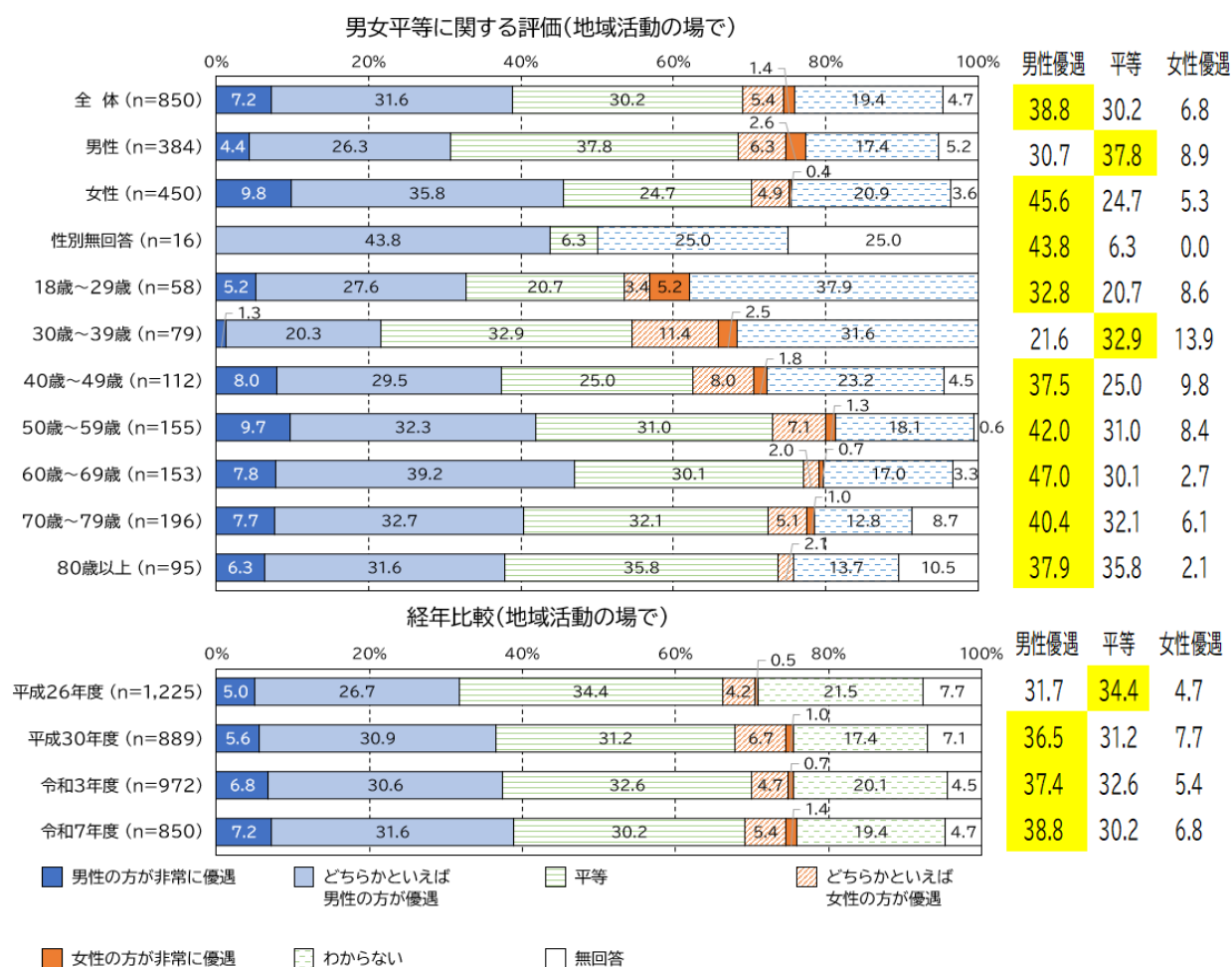
<地域活動の場>

全体では「男性の方が非常に優遇」が 7.2%、「どちらかといえば男性の方が優遇」が 31.6%と「男性優遇」
との回答が 38.8%となり、「平等」を 8.6 ポイント上回った。

性別でみると、男性は「平等」と思う割合が最も高かったが、女性は「男性優遇」と思う割合が「平等」を上回った。

年齢別では、30 歳代で「平等」が「男性優遇」を上回ったが、その他の年代では「男性優遇」とする割合が高かった。

経年比較では、平成 26 年度は、「平等」が 34.4%と最も高かったが、平成 30 年度以降は「男性優遇」が「平等」を上回っている。



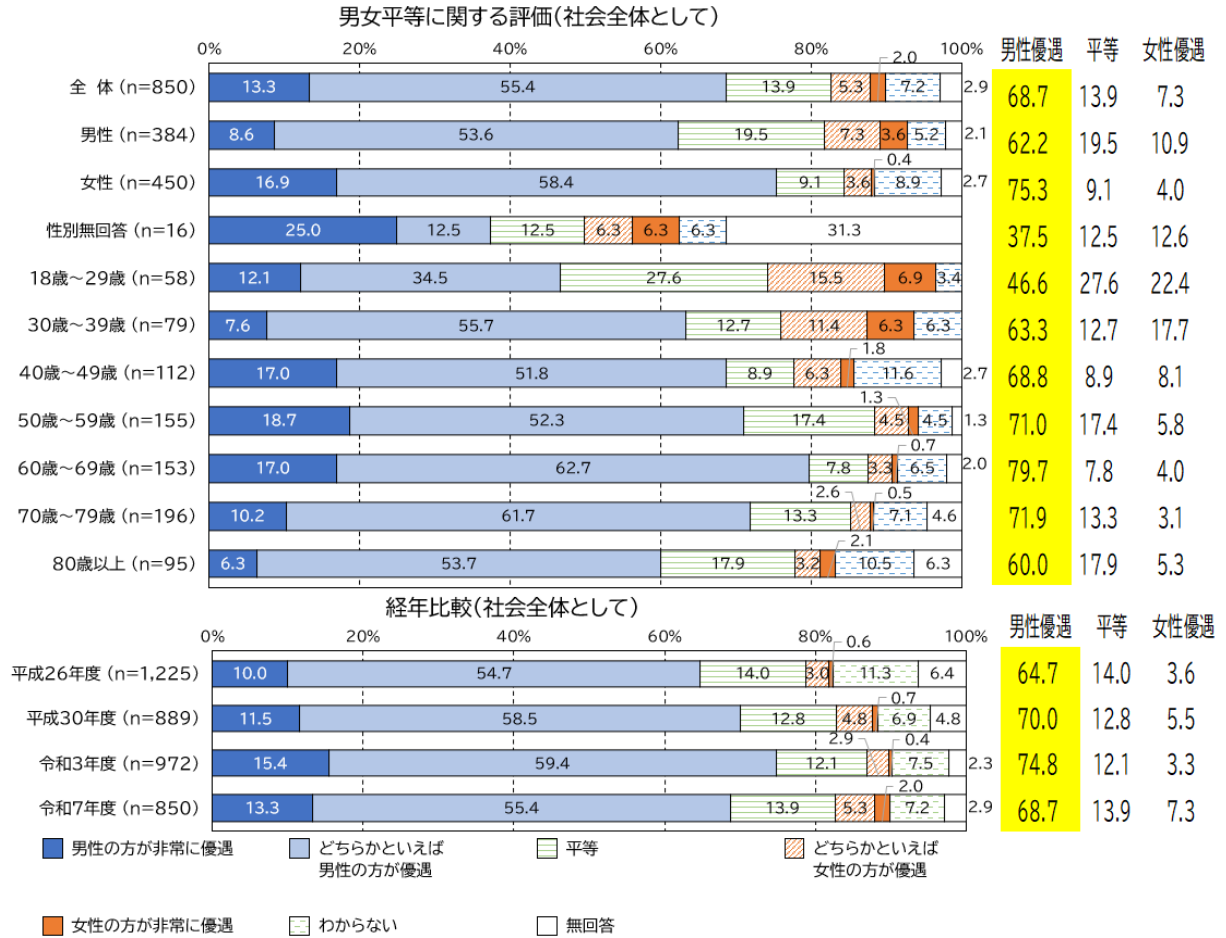
<社会全体>

全体では、「男性の方が非常に優遇」が13.3%、「どちらかといえば男性の方が優遇」が55.4%と「男性優遇」と思う人の割合が約7割となった。

性別でみると、「男性優遇」と思う人の割合は、女性で75.3%と、男性より10ポイント以上高かった。

年齢別でも、全ての年代で「男性優遇」とする割合が高かった。

経年比較では、「男性優遇」とする割合は、前回調査よりやや減少している。

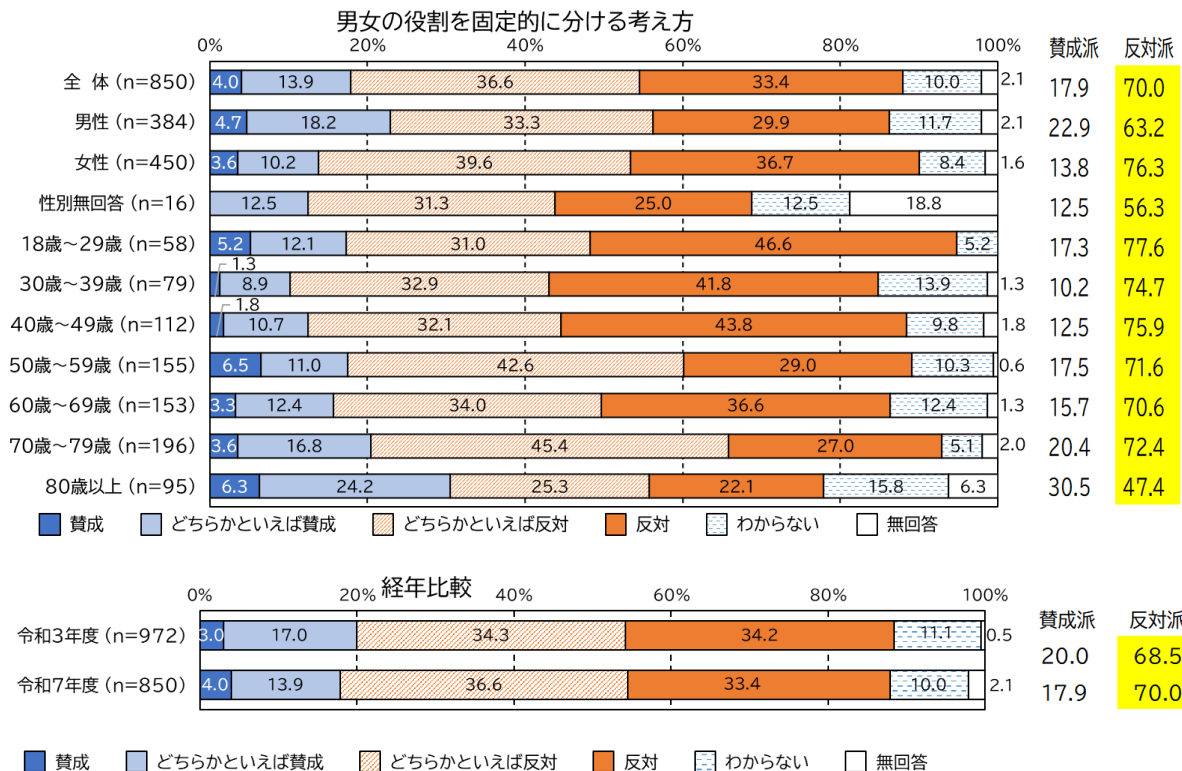


〔問2〕あなたは「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」というような男女の役割を分けて固定的に考えることについて、どのように思いますか。（○は1つ）

全体では、「どちらかといえば反対」が36.6%、「反対」が33.4%と男女の役割を固定的に考えることへの反対が7割となった。

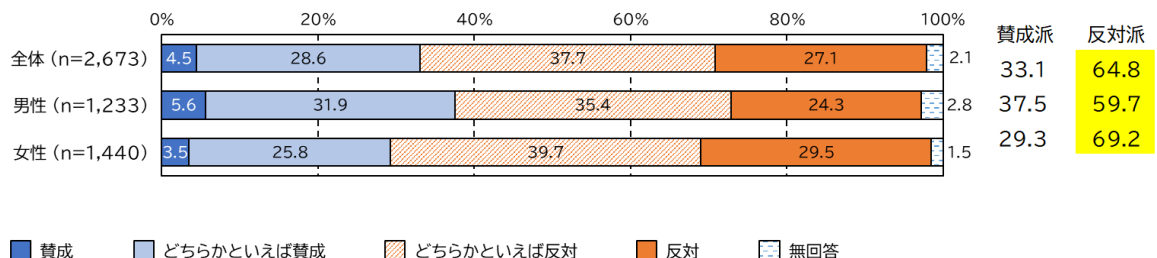
性別で見ると、女性で反対する割合は76.3%と、男性の63.2%とは10ポイント以上の差があった。

年齢別では、全ての年代で「反対派」の割合が高かった。一方、80歳以上では、「賛成」と「どちらかといえば賛成」の「賛成派」が約3割となった。



【参考】内閣府(男女共同参画局)「男女共同参画社会に関する世論調査」令和6年9月調査

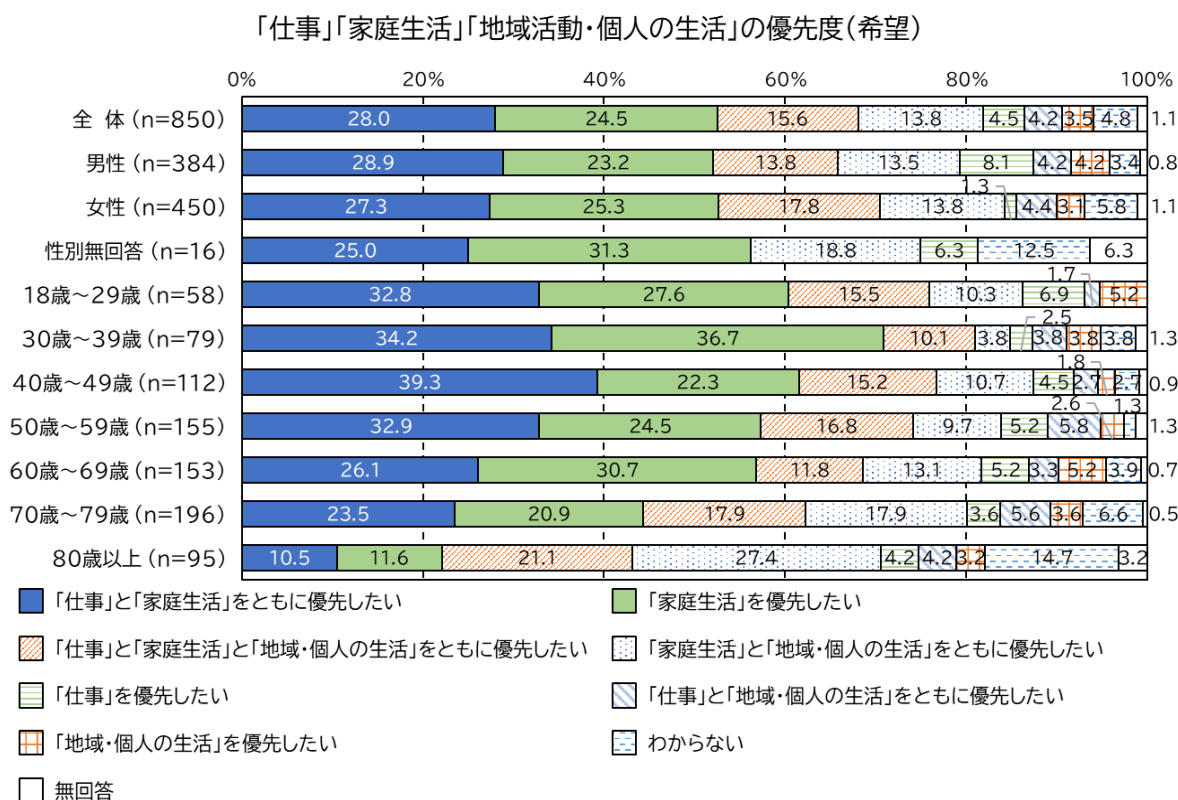
「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、あなたはどうお考えですか。（○は1つ）



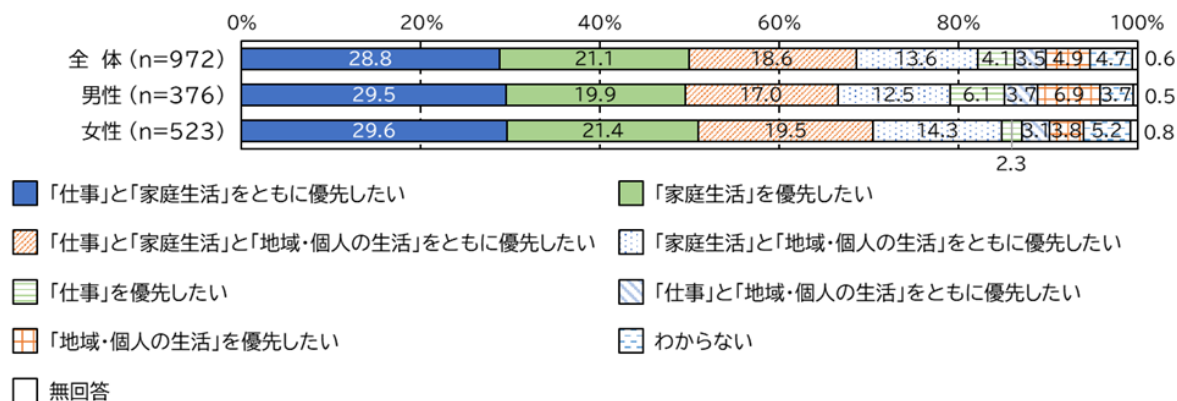
3. 仕事、家庭生活、地域活動、個人の生活についての優先度について

〔問4-1〕 仕事、家庭生活、地域活動（自治会・PTA・地域の付き合いなど）、個人の生活（学習・趣味など）についての優先度をお聞きます
 あなたの希望に最も近いものをこの中からお答えください。（○は1つ）

全体では、『仕事』と『家庭生活』をともに優先したいが 28.0%、『家庭生活』を優先したいが 24.5%と多かった。性別でみると、『仕事』と『家庭生活』をともに優先したいが男性 28.9%、女性 27.3%、『家庭生活』を優先したいが男性 23.2%、女性 25.3%とあまり差がない。年齢別では、『家庭生活』を優先したいと回答した率が最も高いのは 30 歳代で『仕事』と『家庭生活』をともに優先したいと回答した率が最も高いのは 40 歳代となった。



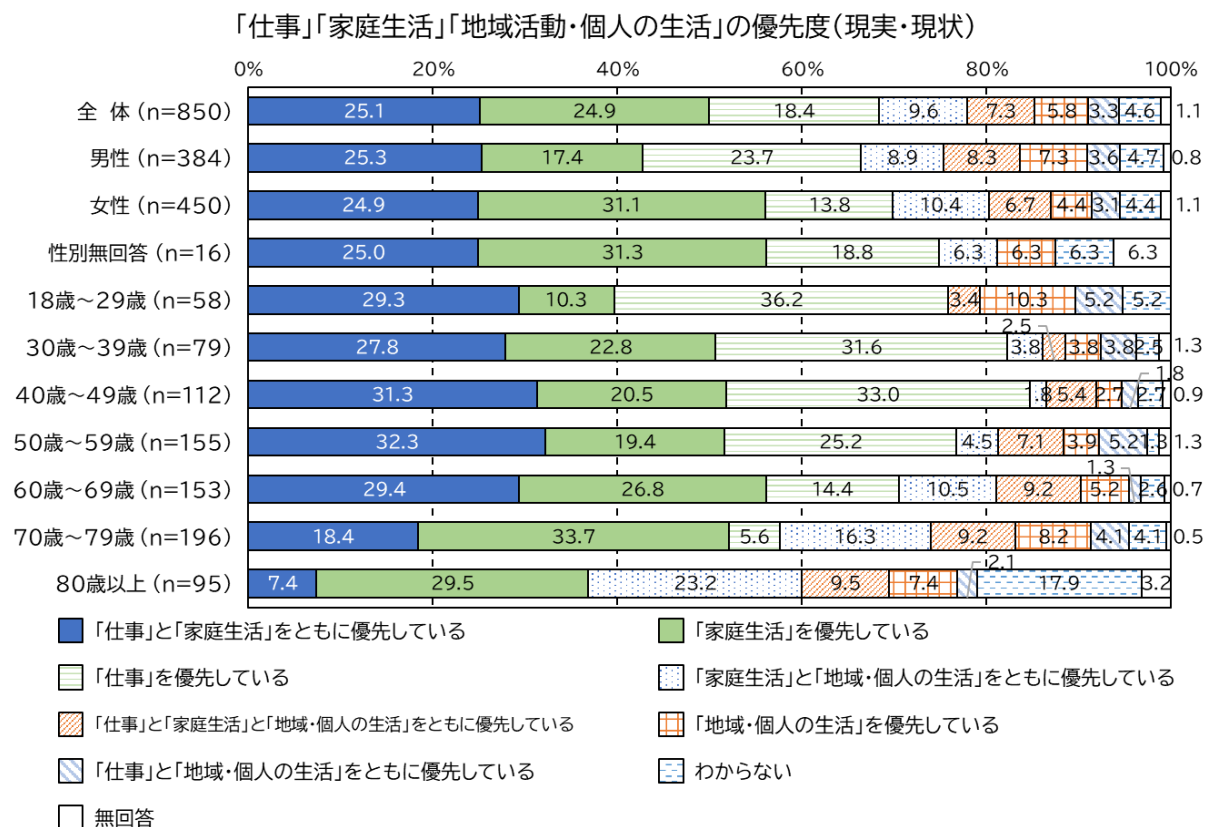
【参考】令和3年度調査結果



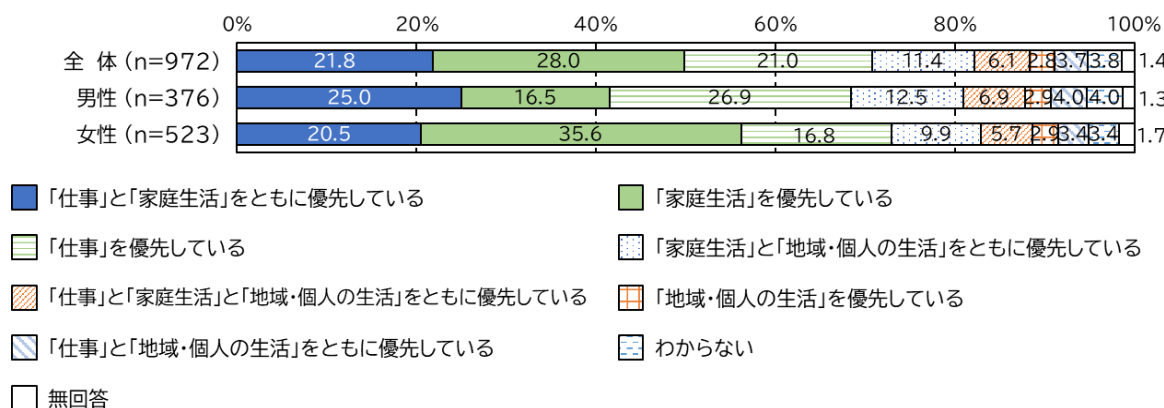
【問4-2】 それでは、あなたの現実・現状に最も近いものをこの中からお答えください。（○は1つ）

全体では、「『仕事』と『家庭生活』をともに優先している」が 25.1%、「『家庭生活』を優先している」が 24.9%と多かった。

性別で見ると、男性では「『仕事』と『家庭生活』をともに優先している」が 25.3%で最も多く、次が「『仕事』を優先している」の 23.7%となった。女性では「『家庭生活』を優先している」が 31.1%で最も多く、次が「『仕事』と『家庭生活』をともに優先している」の 24.9%となった。年齢別では、40歳代以下の年齢で「『仕事』を優先している」がいずれも 30%を超え、最も多かった。



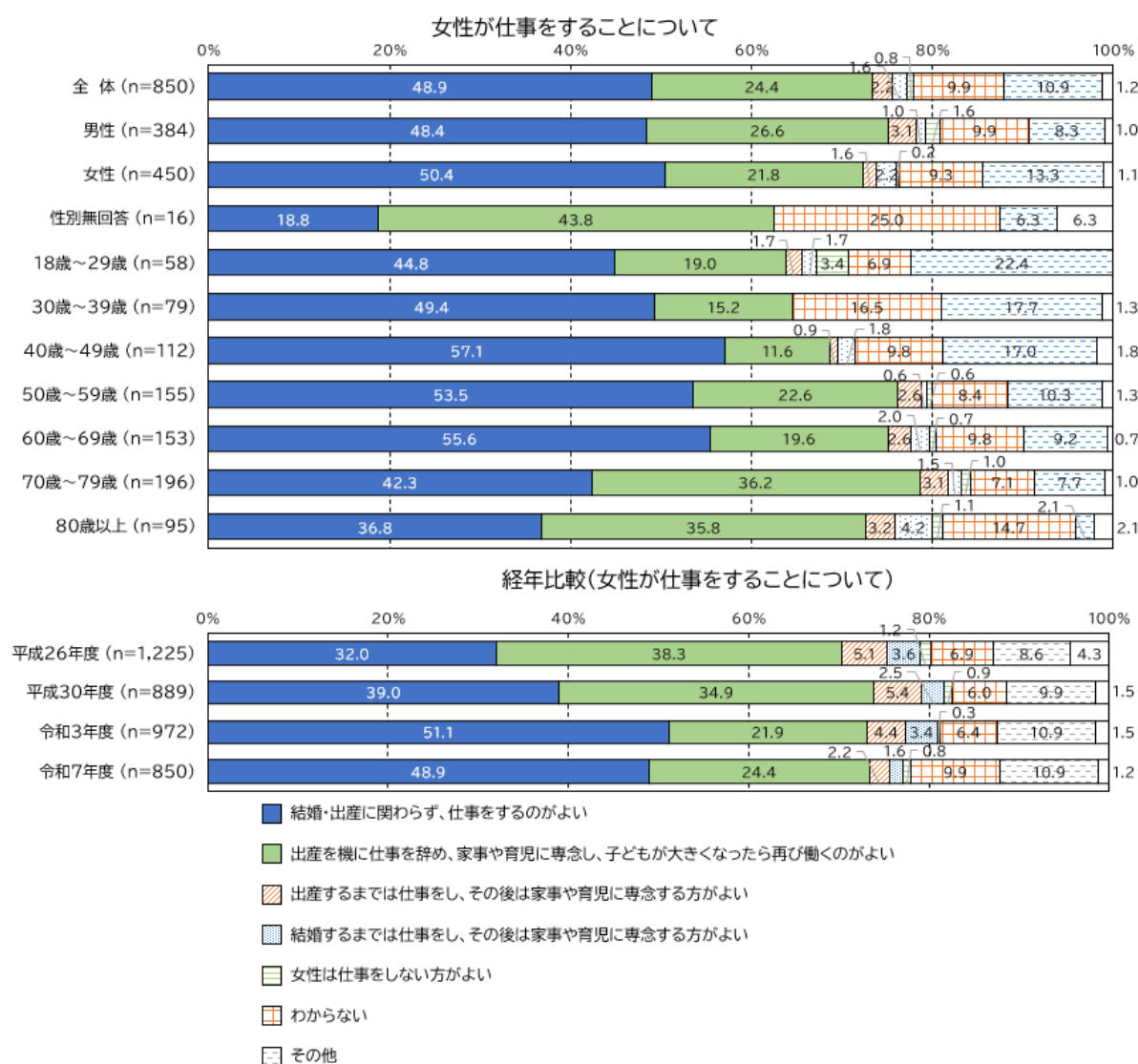
【参考】令和3年度調査結果



4. 仕事、家庭生活について

〔問5〕女性が仕事（収入を得るための労働）をすることについて、あなたはどのように考えますか。
（○は1つ）

全体では、「結婚・出産に関わらず、仕事をするのがよい」と回答した人が48.9%と最も多かった。性別でも、男女別の回答傾向に大きな差はなかった。年齢別では、40歳代で「結婚・出産に関わらず、仕事をするのがよい」と回答した人が57.1%と最も多かった。一方、70歳代以上では、「出産を機に仕事を辞め、家事や育児に専念し、子どもが大きくなったら再び働くのがよい」と回答した人が3割を超えた。なお、前回調査と比較すると、「結婚・出産に関わらず、仕事をするのがよい」と回答した人は、2.2ポイント減少した。



(注)令和3年度以前の調査では、「一般的に女性が職業をもつことについて、どう考えますか。(○は1つ)」と聞いた。

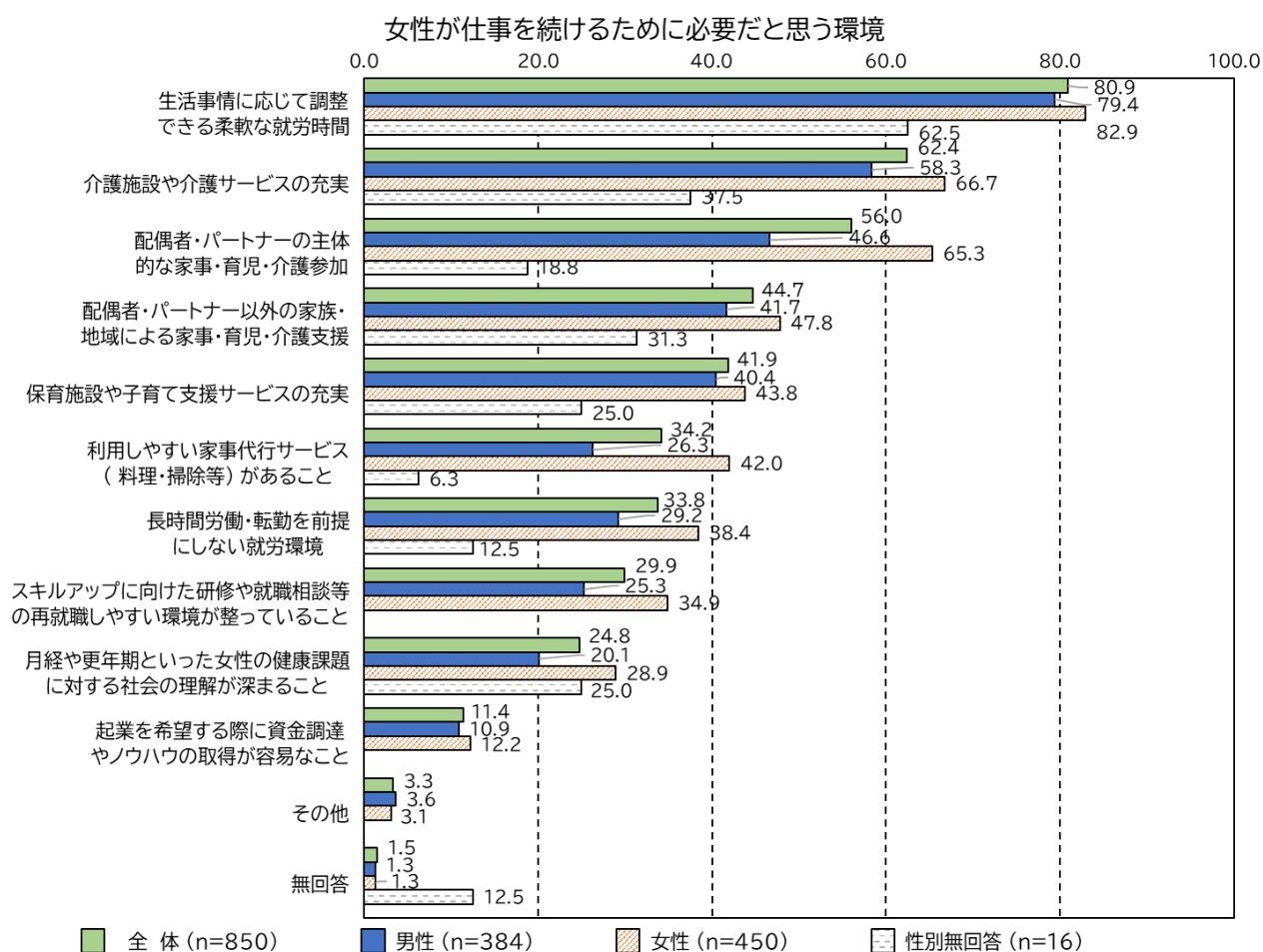
〔問6〕結婚し、子どもを持っても仕事を続けたいと考える女性が増えています。

あなたは、結婚・出産に関わらず、女性が仕事を続けるためにはどのような環境が必要だと思いますか。（〇はいくつでも）

全体では、「生活事情に応じて調整できる柔軟な就労時間」が80.9%、「介護施設や介護サービスの充実」が62.4%、「配偶者・パートナーの主体的な家事・育児・介護参加」が56.0%と上位になった。

性別で見ると、「配偶者・パートナーの主体的な家事・育児・介護参加」と回答した女性は65.3%で男性の回答46.6%を上回ったほか、「利用しやすい家事代行サービス(料理・掃除等)があること」についても女性の回答42.0%に対し男性の回答は26.3%と回答傾向に差が見られた。

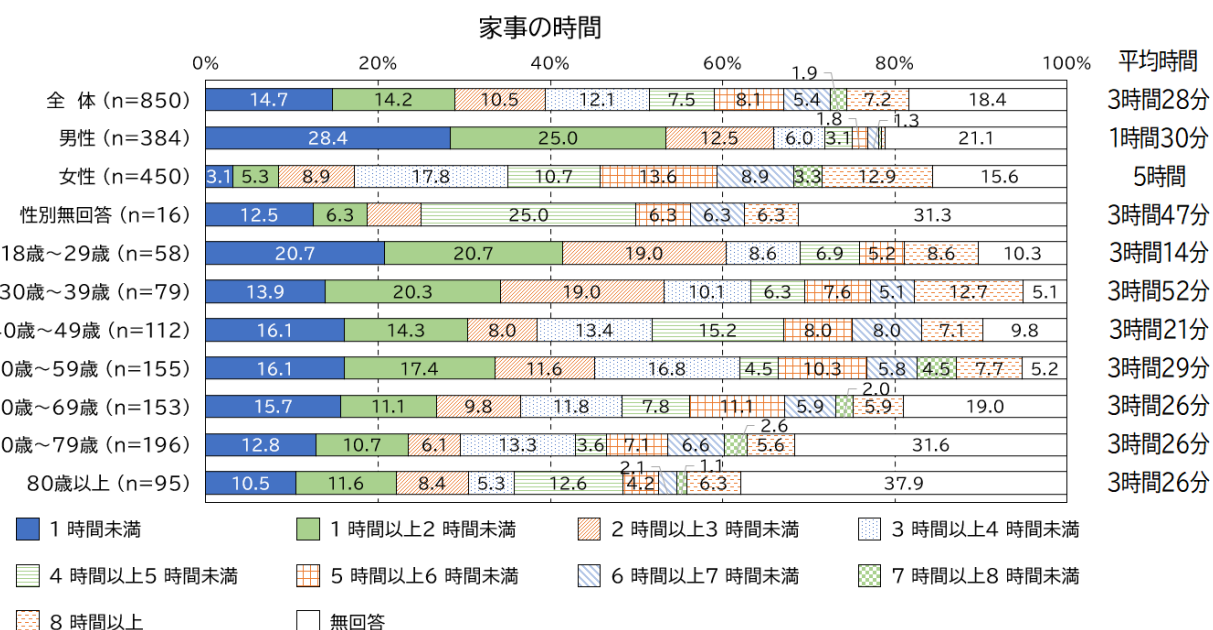
「その他」の意見では、「保育士や学童の職員の待遇(給与面など)の改善」「困った時にサポートしてくれる色々なサービスが受けられること」「男女平等になるよう配慮されるべきで、仕事を肩代わりした際に補償がされるような仕組みを旗振り役の公から整えていくことが重要」などがあった。



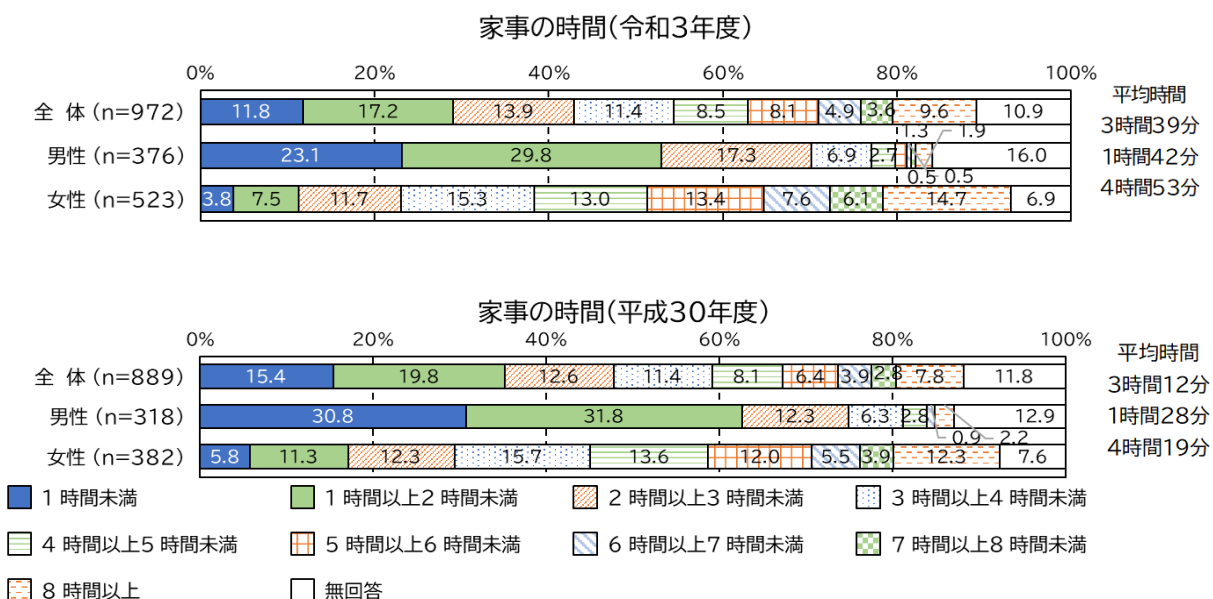
〔問 10〕 あなたが1日に行う家事（育児や介護を含む）の時間は、平均どの位ですか。
 （ ）内に時間をお書きください。（数値を記入）

全体では、無回答を除けば、「1時間未満」が 14.7%と最も多く、次いで、「1時間以上2時間未満」が 14.2%となり、男女合わせた平均の家事時間は3時間28分となった。

性別で見ると、男性では「1時間未満」が 28.4%と最も多く、女性では「3時間以上4時間未満」が 17.8%と最も多かった。平均の家事時間は、男性で1時間30分、女性で5時間となり開きがあった。



【参考】令和3年度・平成30年度調査



5. 男女共同参画に関わることがらや経験について

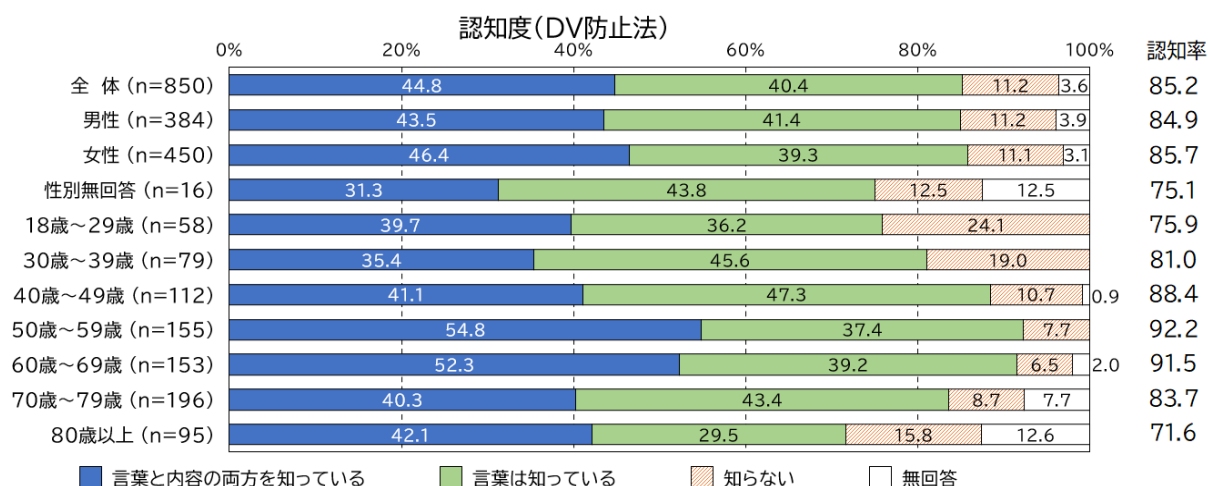
〔問 11〕 あなたは次のことがらについて、どの程度知っていますか。（項目ごとに○は1つずつ）

<DV 防止法(配偶者暴力防止法)>

全体では、「言葉と内容の両方を知っている」が 44.8%と最も多く、「言葉は知っている」も合わせた認知率は 85.2%となった。

認知率では男性、女性に大きな差はなかった。

年齢別では、50 歳代の認知率が 92.2%と最も高かった。

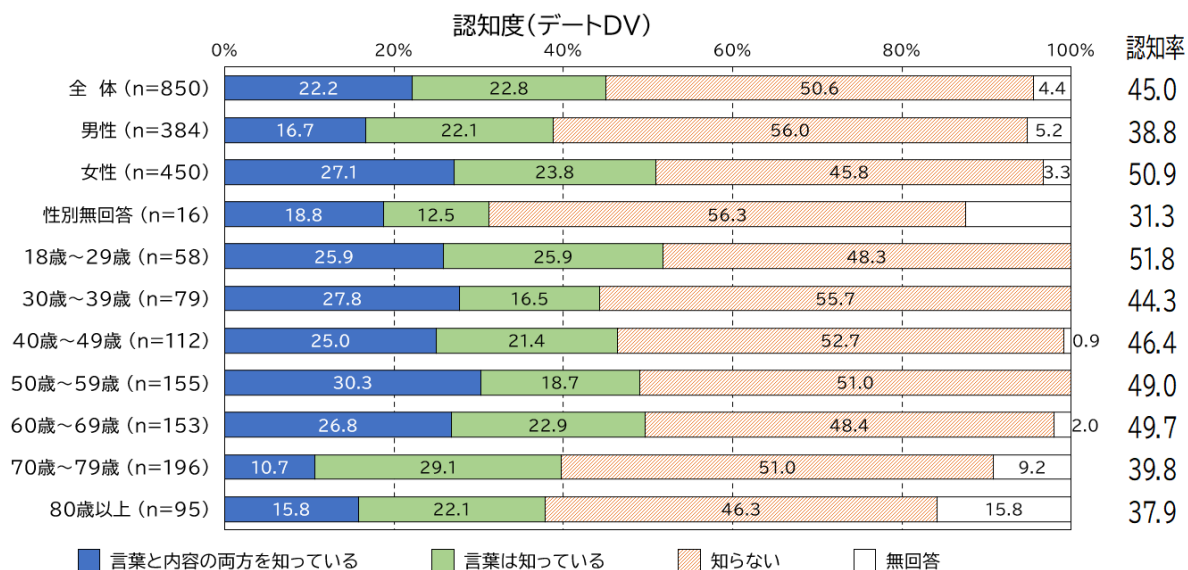


<デートDV>

全体では、認知率は 45.0%にとどまり、「知らない」という回答の方が多かった。

性別でみると、女性の認知率が約 5 割なのに対し、男性の認知率は4割にとどかなかった。

年齢別では、29 歳以下の認知率が 51.8%と最も多かった。

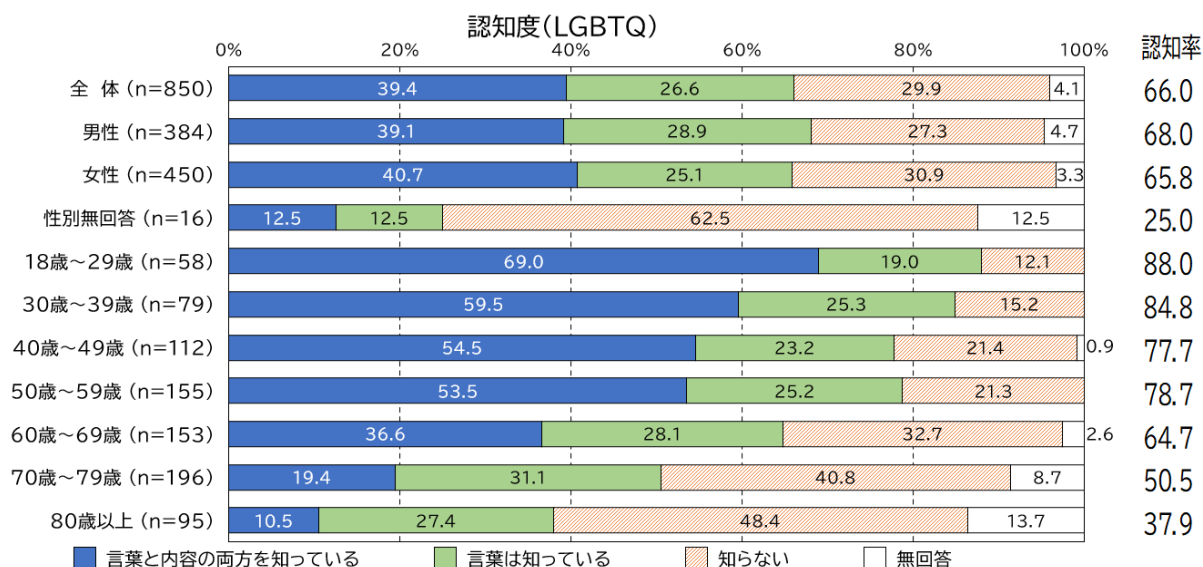


<LGBTQ>

全体では、認知率は 6 割を超えた。

男女で認知率に大きな差はなかった。

年齢別では、年齢が下がるほど認知率は高くなり、特に 29 歳以下では、7 割に近い人が「言葉と内容の両方を知っている」と回答した。

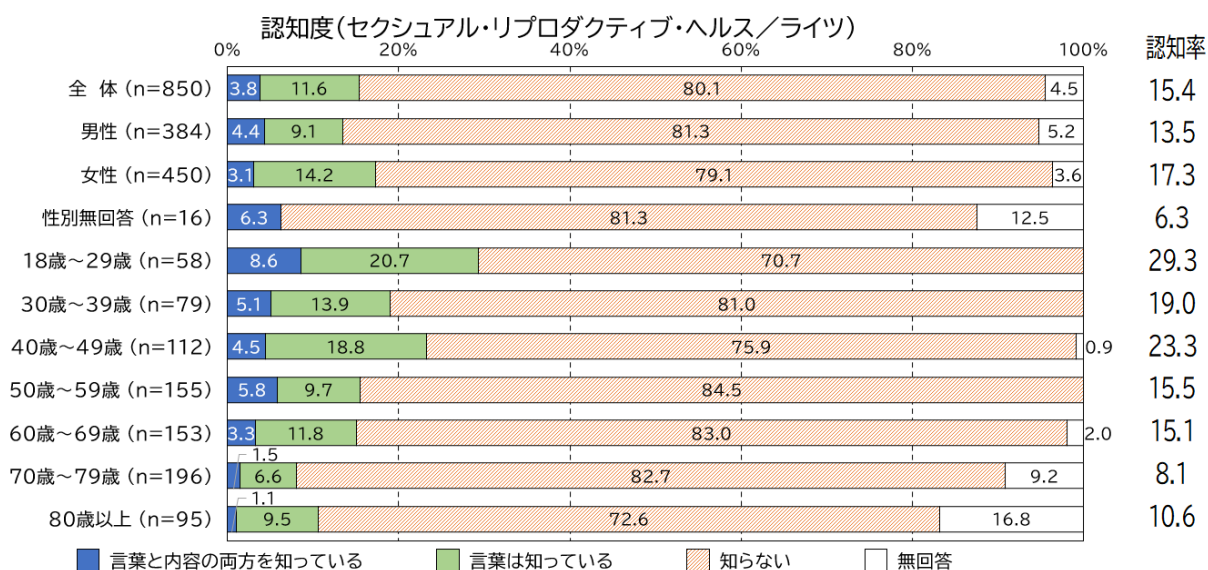


<セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ>

全体の認知率は 15.4%にとどまり、「知らない」と回答した人が 8 割を超えた。

性別でみると、女性の認知率の方が男性に比べやや高いものの、2 割にとどかなかった。

年齢別では、29 歳以下の認知率が他の年代に比べ高いものの、全ての年代で「知らない」が 7 割を超えた。

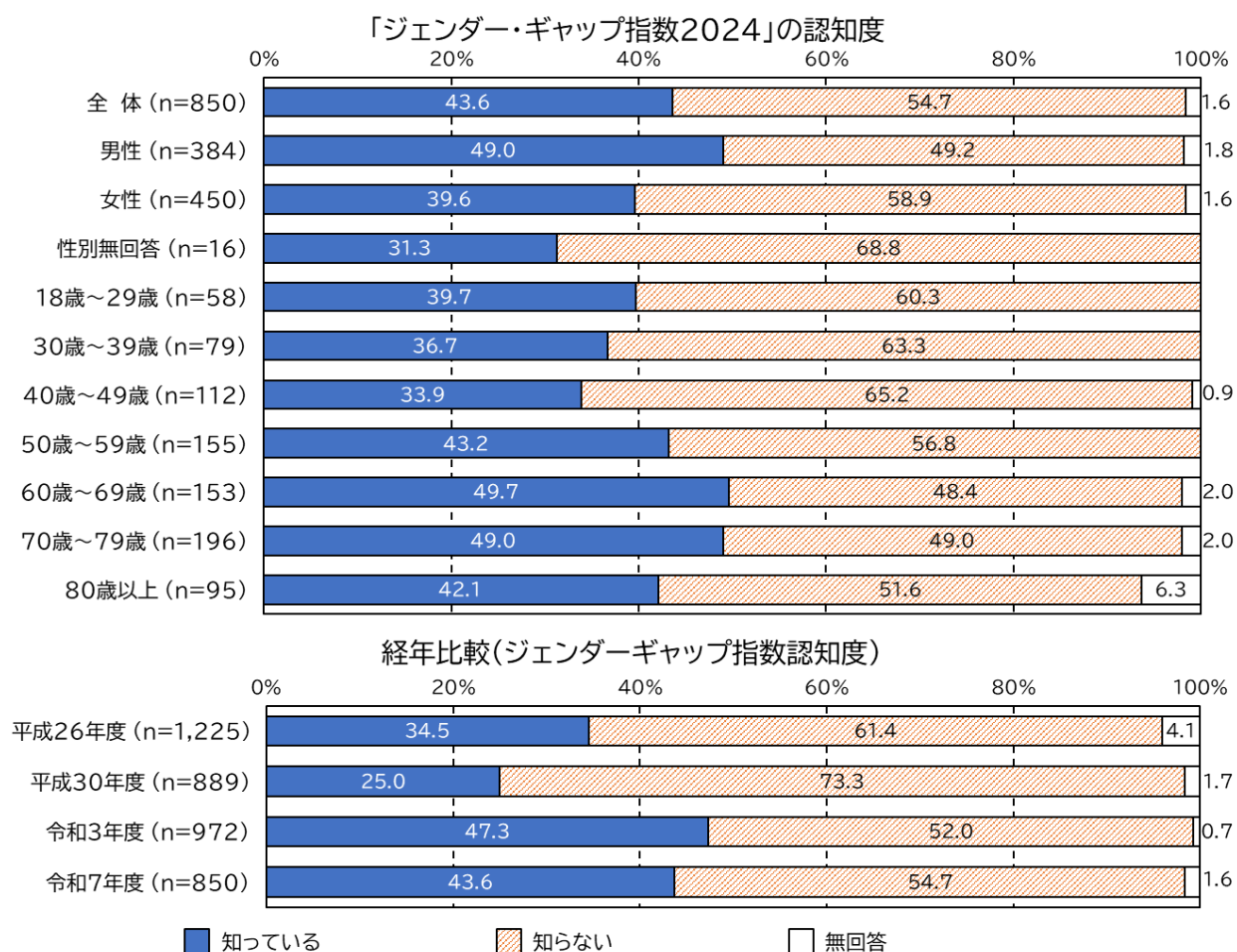


〔問 13〕あなたは、世界経済フォーラムが、社会における男女格差の大きさを国別に比較した「ジェンダー・ギャップ指数 2024」で、日本が世界 146 カ国中の 118 位（主要 7 か国中最下位）であったことを知っていますか（格差が少ないほど順位が高くなります）。（○は 1 つ）

全体では、「知らない」が 54.7%となり、「知っている」の 43.6%を上回った。

男女別では、男性の「知っている」割合が 49.0%で、女性の割合を 10 ポイント程度上回った。

年齢別では、60 歳代の認知率が 49.7%と最も高く、一方、40 歳代の認知率は 33.9%と最も低い。



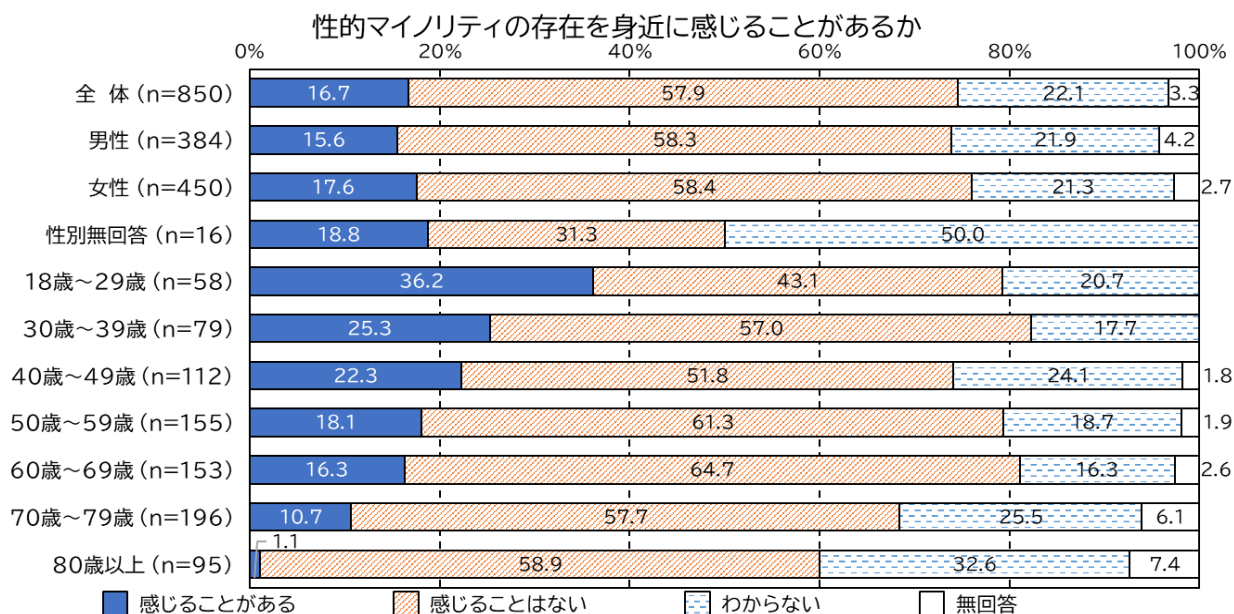
(注)平成 30 年度以前の調査ではジェンダー・ギャップ指数そのものを知っているか聞いた(令和 3 年度は今回の調査と同様に日本の順位についての認知を聞いた)。

6. 性の多様性に関することについて

〔問 16〕 あなたはL G B T Qなどの性的マイノリティの存在を身近に感じることがありますか。
(○は1つ)

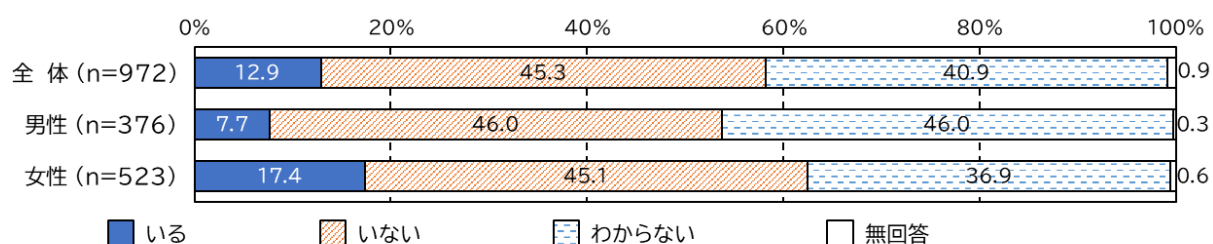
全体では、「感じることもある」が16.7%、「感じることはない」が57.9%となった。

男女別で回答に大きな違いはなかったが、年齢別では、29歳以下で「感じることもある」と回答した人が最も多かった。年代が上がるほど「感じることもある」人の割合は低くなる結果となった。



【参考】令和3年度調査

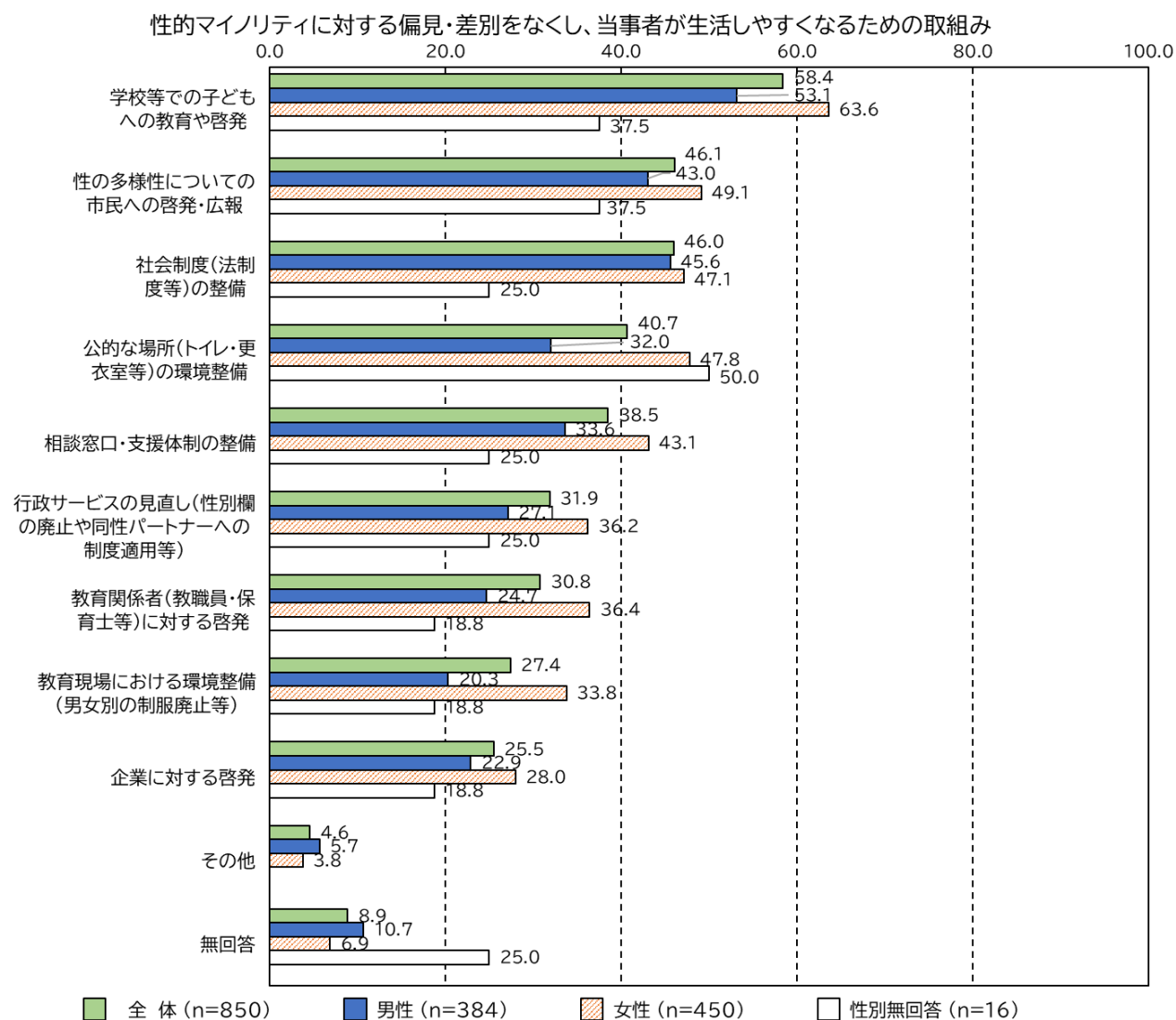
あなたの周りにL G B T Qなどの性的少数者の方はいますか。(○は1つ)



〔問 18〕 L G B T Qなどの性的マイノリティに対する偏見や差別をなくし、当事者が生活しやすくなるためにはどのような取り組みが必要だと思いますか。（〇はいくつでも）

全体では、「学校等での子どもへの教育や啓発」と回答した人が最も多く 58.4%、次いで「性の多様性についての市民への啓発・広報」が46.1%、「社会制度(法制度等)の整備」が46.0%となった。

「その他」の意見では、「当事者との語らいの場やイベント」「公的な場所について、ジェンダーレス〇〇などのあからさまなものではなく、男女関係なく気軽に利用できるものであればいいと思う」などがあつた。

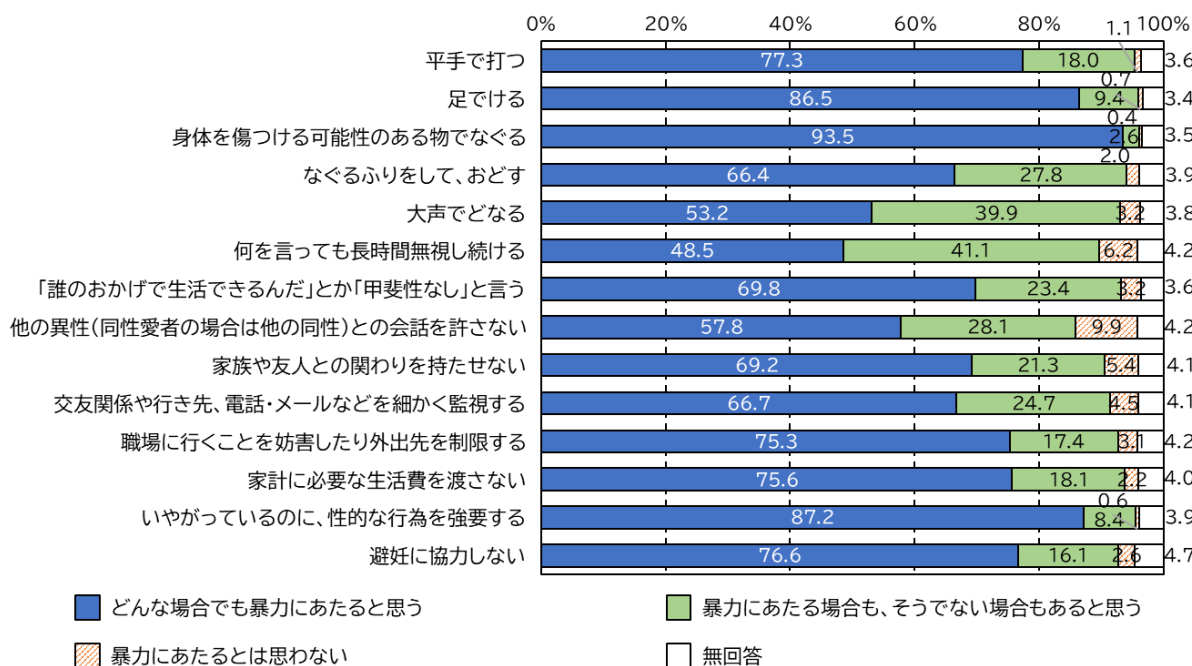


7. ドメスティック・バイオレンス(DV)に関することについて

〔問 19〕あなたは、次のようなことが配偶者間で行われた場合、それを暴力だと思いますか。それぞれについて、あなたの考えに近いものをお答えください。（項目ごとに○は1つずつ）

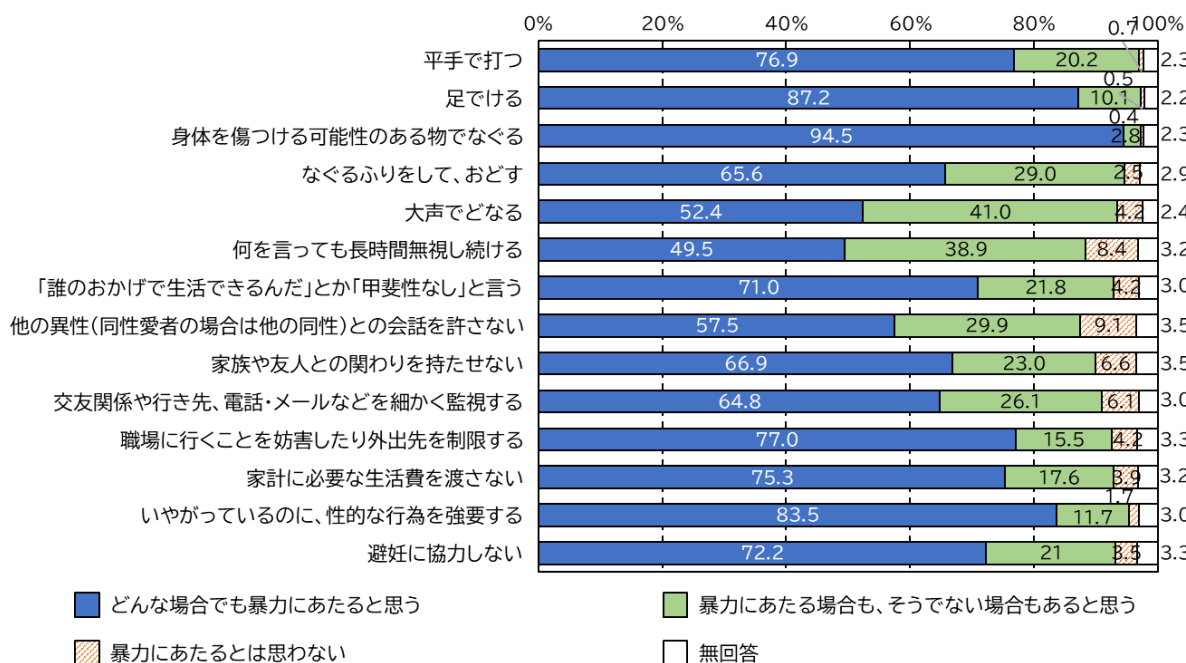
※〔問 19〕〔問 20〕での「配偶者」には、婚姻届を出していない事実婚や同性パートナー、別居中の夫婦も含まれます。

令和7年度(全体 n=850)



【参考】令和3年度調査

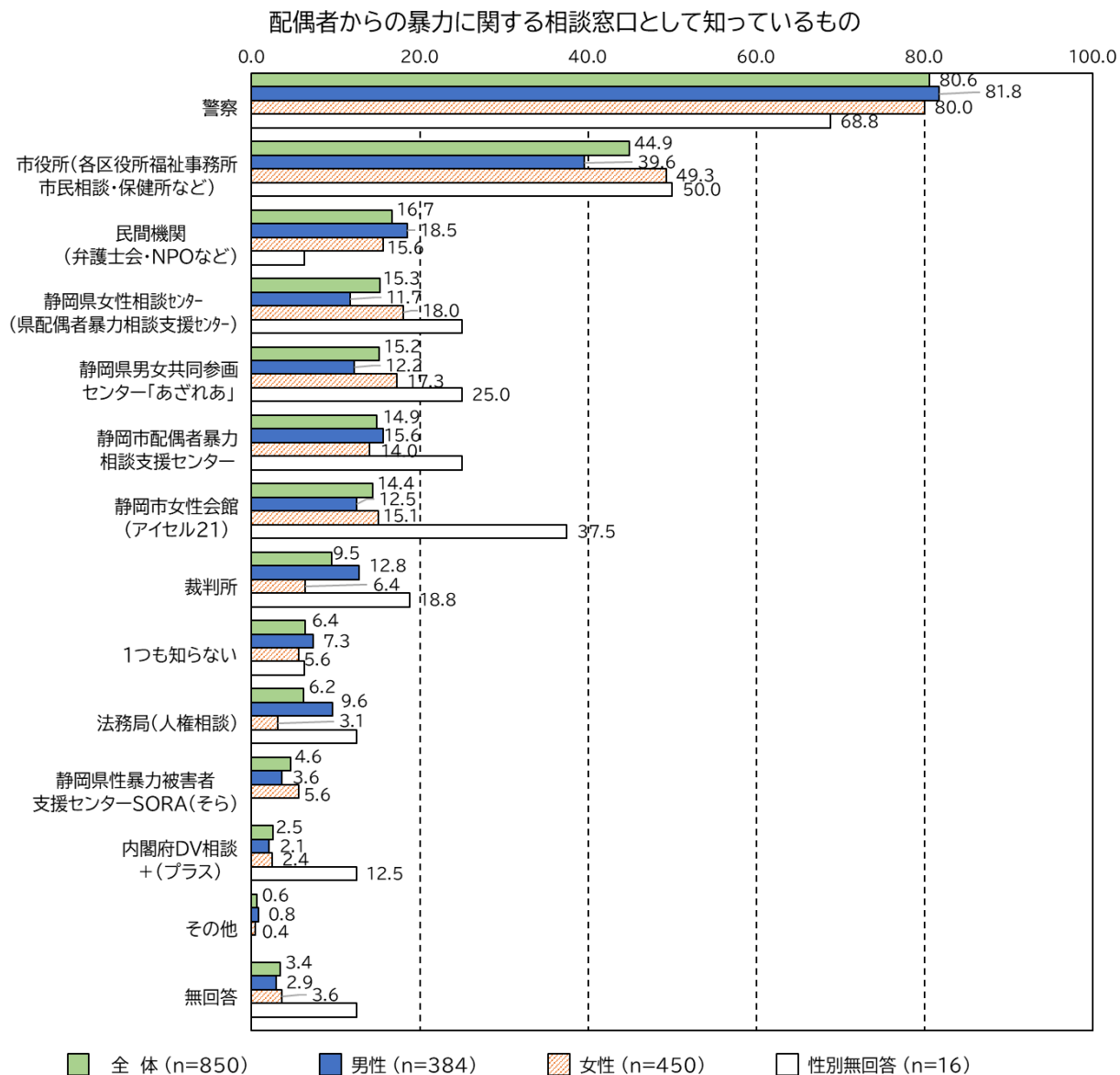
令和3年度(全体 n=972)



〔問 20〕 配偶者からの暴力に関する相談窓口として知っているものを教えてください。
(〇はいくつでも)

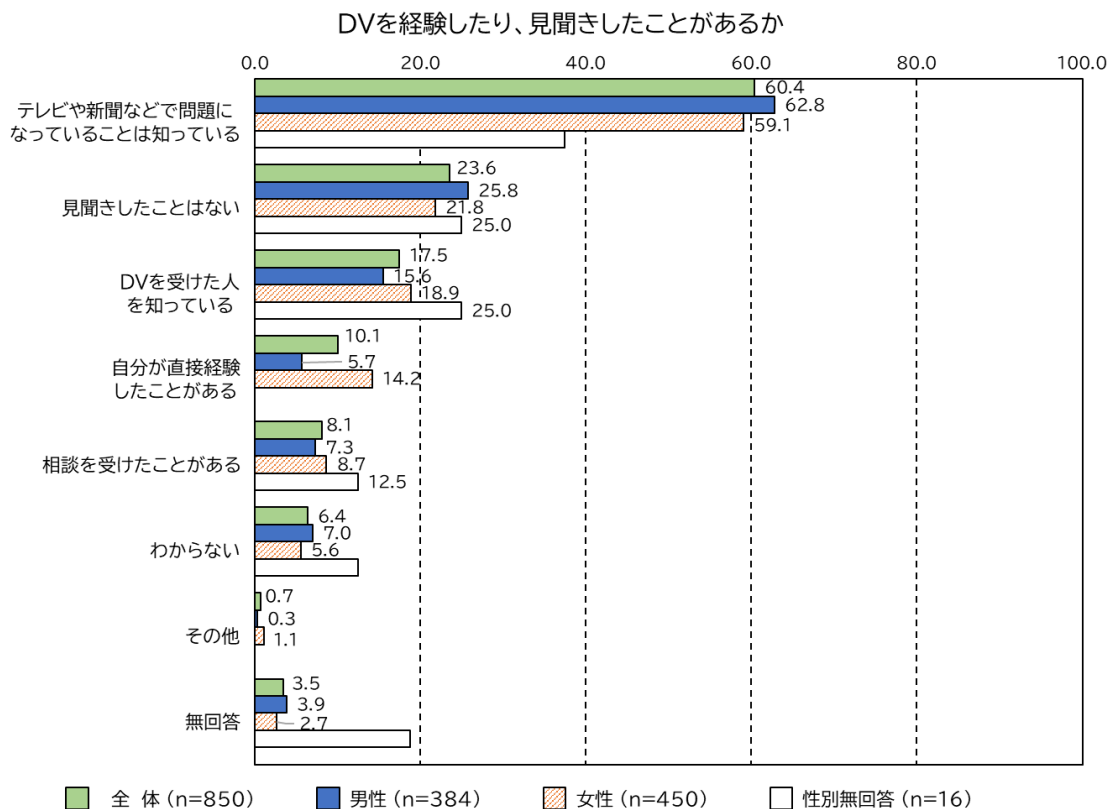
全体では、「警察」と回答した人が 80.6%と最も多く、次いで「市役所(各区役所福祉事務所・市民相談・保健所など)」が 44.9%、「民間機関(弁護士会・NPO など)」が 16.7%となった。

「1 つも知らない」という回答は、全体で 6.4%、男女別では、男性 7.3%、女性 5.6%となった。

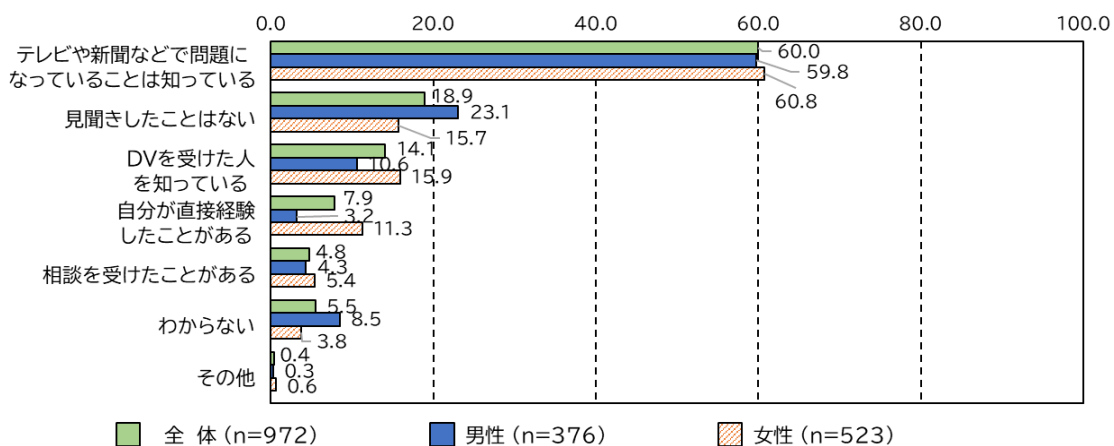


〔問 21-1〕 あなたは、配偶者や恋人、パートナーなど親密な関係にある人々からの暴力、いわゆる「ドメスティック・バイオレンス（DV）」について、経験したり、見聞きたりしたことはありますか。（〇はいくつでも）

全体では、「テレビや新聞などで問題になっていることは知っている」と回答した人が60.4%と最も多く、次いで「見聞きたことはない」が23.6%、「DVを受けた人を知っている」が17.5%となった。
また「自分が直接経験したことがある」と回答した人は、全体では10.1%で、男女別では、男性5.7%、女性14.2%となった。



【参考】令和3年度調査



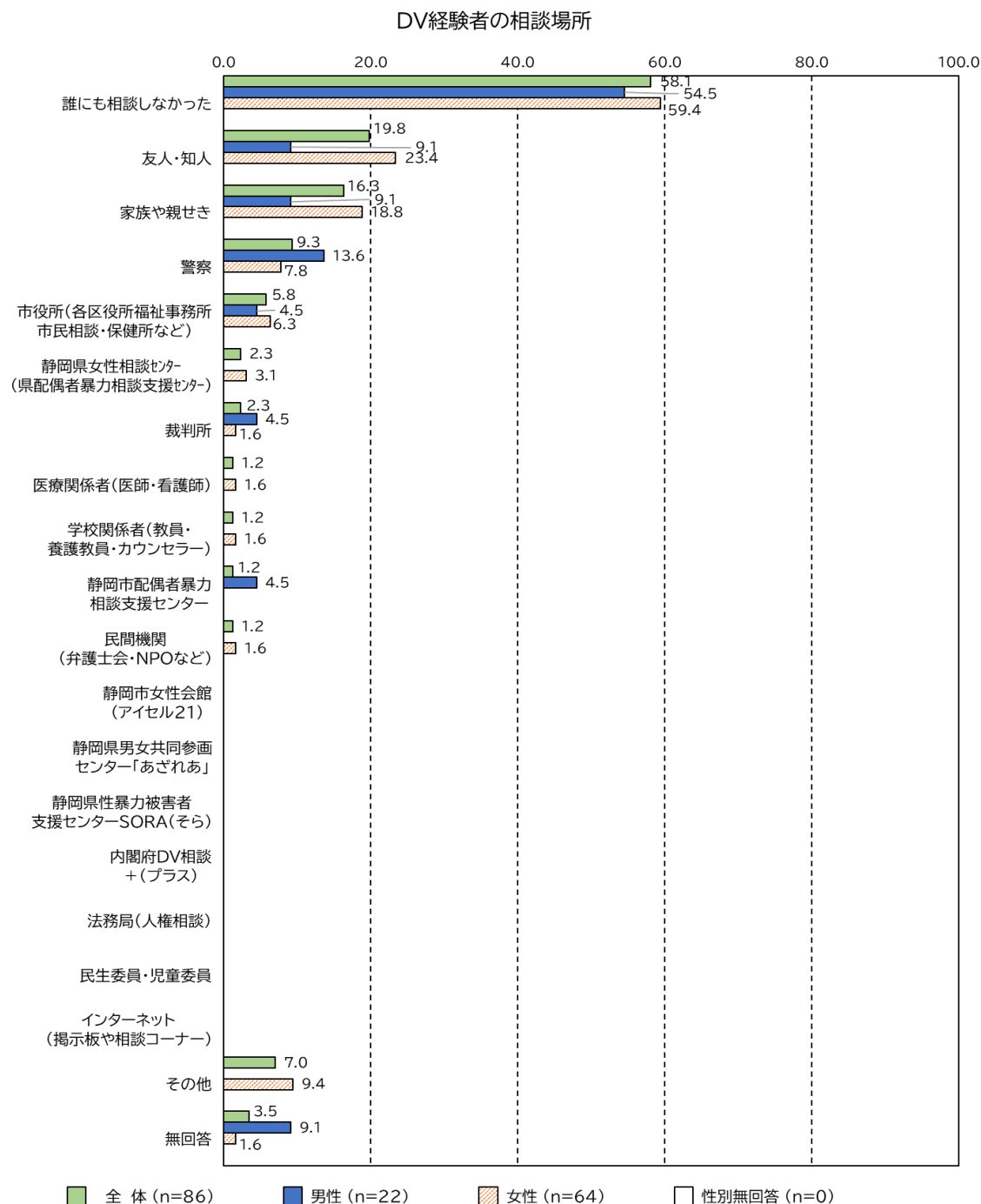
〔問 21-2〕 前の問いで、「1 自分が直接経験したことがある」と答えた方にお伺いします。

あなたは「ドメスティック・バイオレンス（DV）」について、どこかに相談しましたか。

（〇はいくつでも）

全体では、「誰にも相談しなかった」が 58.1%、次いで「友人・知人」が 19.8%となった。

性別でみると、男性では相談先として最も多かったのは「警察」で 13.6%、女性では「友人・知人」が 23.4%、次いで「家族や親せき」の 18.8%となった。「その他」では、「弁護士」「病院」「両親」などがあつた。

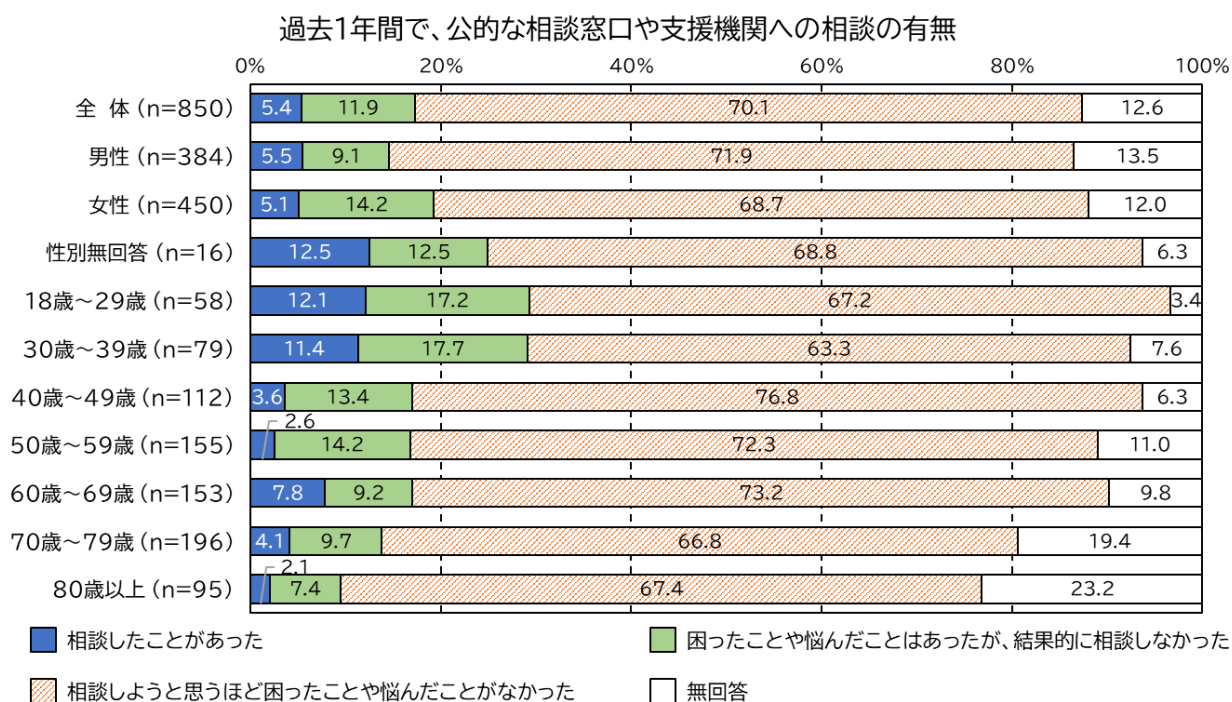


8. 困難を抱える人に対する支援について

〔問 22-1〕 あなたは、ドメスティック・バイオレンス（DV）に限らず、過去1年ほどの間に、何かとても困ったことがあったり、悩んだりして公的な相談窓口や支援機関へ相談したことがありましたか。（○は1つ）

全体では、「相談しようと思うほど困ったことや悩んだことがなかった」と回答した人が70.1%であった一方、「相談したことがあった」が5.4%、「困ったことや悩んだことはあったが、結果的に相談しなかった」との回答も11.9%と、約1割あった。

年齢別でも、「相談しようと思うほど困ったことや悩んだことがなかった」が全ての年代で60%以上となったが、30歳以下の年代では、困ったことや悩んだことがあった人は約3割と、他の年代より高かった。



〔問 22-2〕 前ページ最後の問い(※問 22-1)で、「2 困ったことや悩んだことはあったが、結果的に相談しなかった」と答えた方にお伺いします。相談しなかった主な理由はなんですか。
(〇はいくつでも)

全体では、「相談しても解決しなかった」と回答した人が最も多く 51.5%、次いで「どこに相談していいかわからなかった、相談先を知らなかった」が 33.7%、「そのときは『相談するほどのことではない』と思った」が 22.8%となった。「その他」の意見では、「相談しても仕方がないとあきらめていた。子どもに話す事で解消していた」「子どものころ(のこ)で、それが相談して解決できることだと思ってなかった」「過去に相談し、ひどい対応をされた為」などがあつた。

